愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第13号
2012.5
17-28p.

江南市音楽寺遺跡出土の美濃須衛窯型瓦塔

永井邦仁

江南市に所在する音楽寺遺跡は、平成4年度に発掘調査が実施され多量の瓦塔片が出土したことで注目された。瓦塔は4基に分類されるが、今回調査した結果1基は美濃須衛窯型であると考えられる。本稿では、まず出土状況からこれらの瓦塔が金堂内に造立されていた可能性を指摘し、加えて美濃須衛型瓦塔の展開についても概観した。

1.　はじめに

愛知県江南市に所在する音楽寺は、江戸時代の円空仏（十二神将像）で著名な浄土宗の寺院である。その境内はかつてより古代瓦が採集されることで知られ、音楽寺遺跡という古代寺院の遺跡として周知されている。その音楽寺遺跡で、平成4年度に江南市教育委員会による発掘調査が実施され、多数の古代瓦とともに塼仏や風招などの寺院建築の荘飾が出土し、廃絶した古代音楽寺の伽藍遺構が検出された。

その発掘調査で注目されたのが、多量の瓦塔片が出土したことである。しかもその中には、形状復元が可能なほどの大きな破片も伴っており、まれにみる出土状況であった。これに起因して音楽寺境内には瓦塔の模型が立てられている。当該瓦塔は、宮川芳照によって実測図で紹介され（宮川1996）、江南市教育委員会で作成された報告書（江南市教育委員会1996）では、カラー写真も付して報告されている。その中で宮川は、出土した瓦塔片の分類から4基の瓦塔が造立されていたことを示した。

このように音楽寺遺跡出土瓦塔は、現状で2つの大きな特徴を有している。第1点は、愛知県における古代寺院跡出土瓦塔の中で、発掘調査を経ている希少な事例ということである。第2点は、須恵器窯跡以外で一遺跡から複数個体の瓦塔が出土した、これも希少な事例ということである。

筆者は、この瓦塔（群）について製作技法的な観点から関心を寄せていたが（永井1999）、

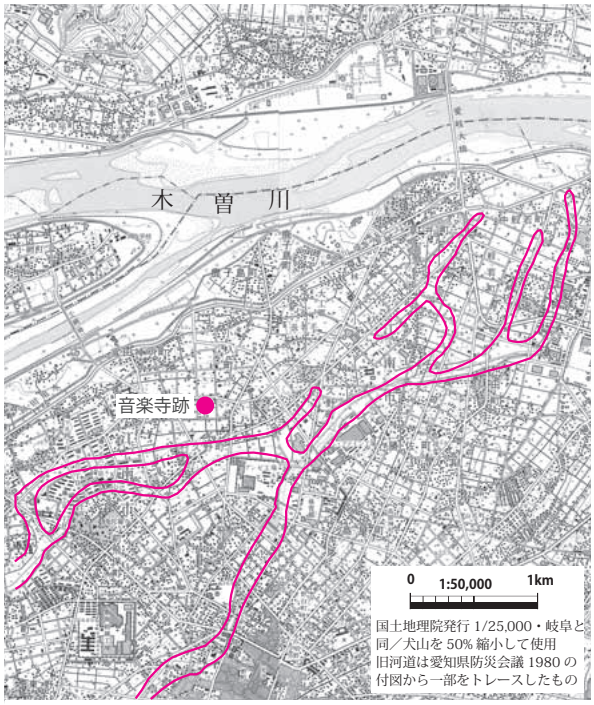


図1　音楽寺遺跡の位置

実測図も提示されていることから特段の調査も進めていなかった。しかし、報告書の実測図中に美濃須衛窯産瓦塔に類似する破片のあることに気づき、平成20年度に機会を得てこれを調査することができた。調査にあたっては江南市歴史民俗資料館のご協力をいただいた。

本稿では、古代音楽寺における瓦塔群の造立状況を検証するところから始め、次いで個別瓦塔の観察結果を記す。そして美濃須衛窯産の可能性がある瓦塔に起因して、同窯産瓦塔の類型化を試みることにする。

2. 古代音楽寺と村国氏

音楽寺遺跡は江南市村久野町に所在し、北約 1km のところを木曽川が東西に流れている。木曽川は現在、愛知県と岐阜県の境になっているが、かつては概ね令制尾張国と美濃国の国境でもあった。したがって音楽寺遺跡はその国境近くに位置することになる。木曽川が現在の河道に集束・固定化されるのは近世以降であり、中世以前は本流からいくつにも分流していたとされている。想定される旧河道の 1 つは音楽寺遺跡の南側を通っており、その立地から同寺の造営に河川交通が大きく関わっていたことを想起させる（図 1）。

音楽寺遺跡が立地する古代葉栗郡は、尾張国の北西隅に位置し一部は木曽川現河道の右岸にも存在する *。同郡は平安時代中期編纂の『和名類聚抄』では 5 つの郷（葉栗・河沼・大毛・村国・若栗）の存在が記されているが、音楽寺遺跡の所在地は、村久野という地名から推測して村国郷に該当すると考えるのが通説となっている（高木 2001）。村国郷の名は古代豪族の村国氏に由来し、壬申の乱（672）で大海人皇子（天武天皇）を支えて軍功を挙げた美濃出身の舎人村国男依はその一員である。村国氏の本拠は『和名類聚抄』にある美濃国各務郡村国郷と考えられるがその位置に定説はない。村国氏はその後地方豪族から中央貴族へと進出し、平城京近郊の大和国添下郡にも村国郷が存在するが **、天平宝字 8 年（764）に起きた恵美押勝の乱で、男依の子孫である村国連氏が没落しており（野村 1980）、そのためか在地にその痕跡を多く留めていないようである。各務郡の古代寺院を研究する小川貴司は、村国真墨田神社が所在する各務原市鵜沼地区が同氏発祥地であり、渡来系の各務勝氏を取り込みながら各務地区などへ進出したと推測し、その範囲がおおよそ美濃国各務郡村国郷の所在とみている（小川 2004）。氏族の勢力範囲を時間軸で動態的に捉える興味深い説であり、尾張国の村国郷も同様に考えると、同氏が河川交通を介して木曽川左岸にも居住地を増やしていった痕跡であるといえる。

一方、考古資料である瓦から古代音楽寺と村国氏の関わりを示唆した研究もある。梶山勝によると音楽寺遺跡出土の「濃国」「濃□（中カ）」文字瓦が、和銅元年（708）を上限とする 8 世紀前葉に美濃国からもたらされたものであるとし、さらに同遺跡出土の細弁蓮華文軒丸瓦と同笵の可能性が高い瓦が、岐阜県各務原市山田寺跡と奈良県奈良市姫寺跡で出土しており、この 3 者をつなぐものとして村国氏の存在が考えられるという。瓦は造営氏族の資材調達方法を反映する遺物であることから、これによって古代音楽寺と村国氏の評価が確定的になり、加えて年代的にも 8 世紀前半のことであることから、同氏が時勢にのって拡大した状況をうかがい知ることができるようになったといえよう。

3. 古代音楽寺の瓦塔造立状況

音楽寺遺跡の発掘調査では、境内に設定したトレンチで基壇建物遺構の一部を検出しているが、その具体像はまだ不明な点が多い（図 2）。観音堂西側で検出された基壇遺構が金堂の西・南縁、そこから東方のトレンチで検出された版築の土層が塔と推定されているが、規模や礎石は明確になっていない。これら堂・塔の北側にも根石や床面といった基壇遺構があるといい、報告では講堂跡と推定されている。概ね法起寺式伽藍配置を想定してのことと思われるが、梶原義実によると、金堂跡の南北長から推定するとこれが東面する川原寺式伽藍配置の可能性もあるという（梶原 2010）。そしてこれら伽藍遺構の周囲からは瓦溜まりが検出され多量の瓦が出土している。

瓦塔は金堂跡の周辺で出土している。出土地点は、観音堂西側のトレンチ 4 ～ 6 を中心とする一帯に限られる。このように、調査範囲が境内各所に及んだのにもかかわらず出土位置が比較的集中している点は重要である。なぜなら通常、瓦塔は地表面や建物内で造立されていた

* 天正 14 年（1586）の洪水で郡域中央に新しい木曽川流路ができ、それを新国境としたため同川右岸にも古代尾張国葉栗郡域が存在する。

** 奈良県大和郡山市東部に比定される（柳澤文庫専門委員会 1966）。

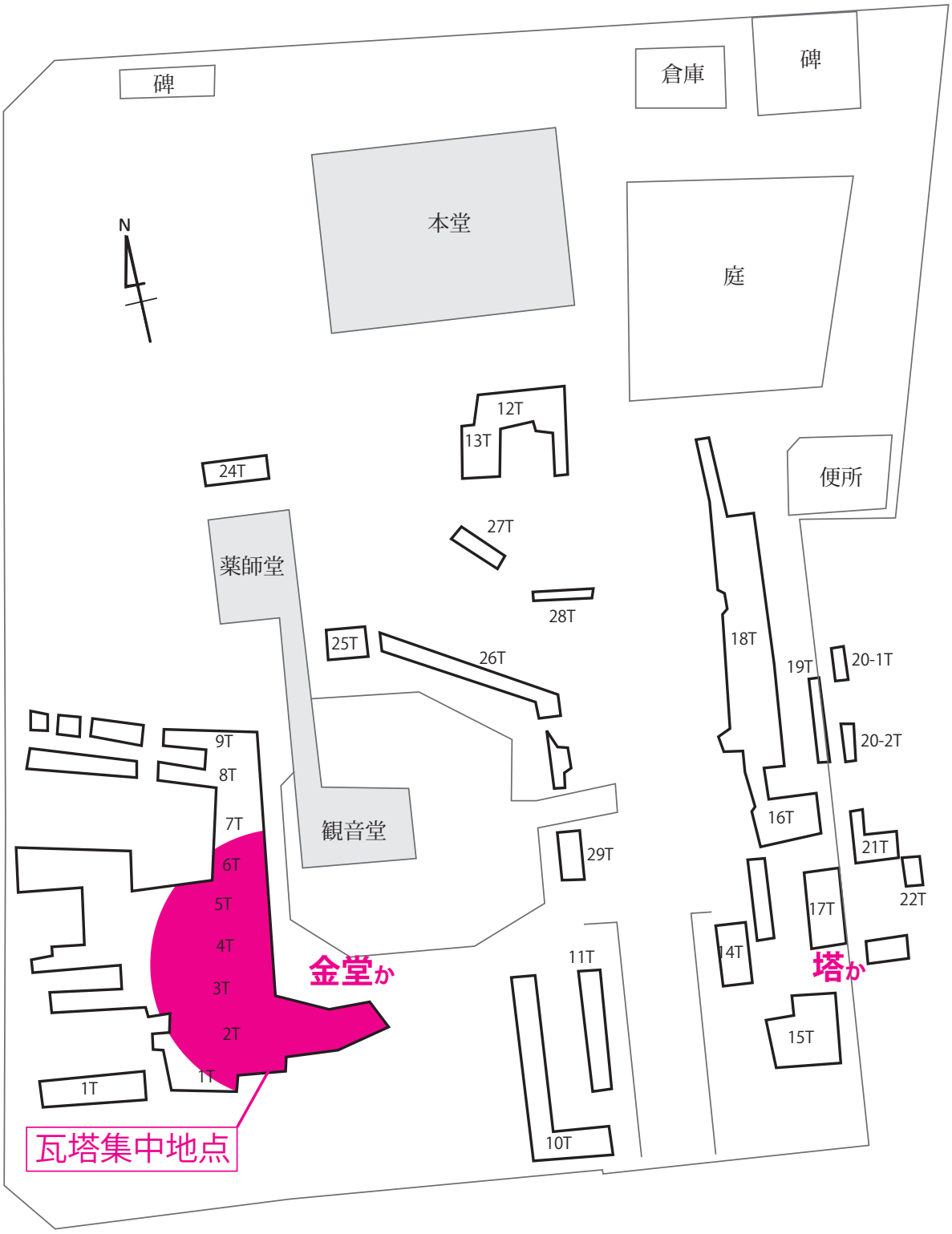


図２　音楽寺遺跡の調査トレンチ配置と瓦塔出土地点

と考えられるので、その場で倒壊し片付けられぬまま寺院等が廃絶すると、地表面の撹乱が進むにつれて徐々に移動してやがて広範に散逸してしまうからである。言い換えると、土坑内に埋蔵されるような場合を除くと、瓦塔が限られた範囲から出土しているということは、倒壊・廃棄後の撹乱をある程度免れたということであり、結論として概ね瓦塔の造立位置を示しているということになる。このことから、古代音楽寺では金堂内もしくは金堂西側の軒下空間に造立されていたと考えられる。しかも報告にあるように出土した瓦塔片は 4 基に分類可能であることから、いずれも同一位置に造立されていたものとみてよかろう。ただしそれが同時であったか時間的な前後関係にあるのかは不明であり、この点については後述したい。

そして出土状況を報告によって補足すると、金堂跡の「外装石とその縁辺から瓦塔片が、瓦層の下から出土、瓦が堆積する以前に遺棄されたとみられる。大型の破片は、金堂跡の南辺と西辺の外装石縁辺から出土、瓦塔の大半がここに集中していた」という。また「金堂跡の周辺からは、北側のやや離れた場所から塼仏 4 体、瓦塔片」が「基盤直上から出土している」とも記述されている。このことから瓦塔（群）は、瓦葺き建物の廃絶以前に、堂内荘厳に使用される塼仏等とともに破損などの理由で不要になり裏手へ廃棄されたとも考えられる。この場合、梶原が指摘したように金堂が東面していたならば建物西側は文字通り裏手にあたるわけで、興味深い位置関係にあるといえる *。

* 検出された金堂跡が川原寺式伽藍配置の西金堂であるとすると、そこから想起されるのは、奈良市海竜王寺の西金堂内に所在する五重小塔である。当該木製小塔は 8 世紀半ばに製作されたと考えられ、以来西金堂内にあったものとされる（岡田 1978）。海竜王寺の場合は、塔がない伽藍であることからその代用という解釈もあるが、ともあれ瓦塔が堂内に造立された景観はこれに近いものとなろう。

4. 音楽寺遺跡の瓦塔について

出土した瓦塔片は遺物コンテナ 3 箱に相当し、そのほとんどが小片である。しかし一部は巨大な破片で出土している。それは瓦塔 (1) に相当し、計上していないが破片点数でも最大量を占めるものと考えられる。本項では、新たに作成した実測図も加えながら分類ごとに提示する。

瓦塔 (1)　図 3-1・2。巨大な破片からわかるように軸部と屋蓋部を一体成形しているのが最大の特徴である。焼成は硬質で色調は暗灰色である。

屋蓋部は緩やかに反り、断面が円形の棒状粘土を等間隔に貼付けて丸瓦列とし、軒先から 1cm ほど突出する。ただし軒丸瓦の瓦当は表現していない。平瓦列の断面は中央がやや凹み丸瓦列との関係も滑らかで、しかも全体的にほぼ均一な仕上がりとなっている。おそらく先端に丸みのある櫛歯状の型でナデを施すことで均一になるようにしたものと思われる。またこの型は丸・平瓦一枚分を示す節を入れる際にも使われたとみられ、実測図にあるように横一列に揃っているのである。一方、裏面には垂木表現があり、二軒構成であることが明瞭なのであるが、丸瓦列とは対応させずに他の猿投窯型瓦塔に比べて疎らな配置となっている。そして垂木の長さも短めなのも特徴である。

軸部壁体は粘土紐を輪積みして成形しており上半部でその接合痕が認められる。壁体表側下半部には隅に 2 本とその間に 2 本の計 4 本の柱がヘラ削り出しで表現され、その上に長押が四壁を全周する。上半部は組物表現がなされ、持ち送りは比較的厚みのある粘土塊をヘラで削るなどして凹凸を表現している。その配置は、柱に対応し隅のものは斜めに突出する。隅部持ち送りとその周辺の形状は破片ごとに小異がある。持ち送りの一部には赤色塗彩の痕跡が認められる。そして持ち送りの上には空中粘土帯を載せて、壁体との間に接合のために粘土が補充される。空中粘土帯は枡や肘木を表現するために下部をヘラ削りして段差をつけてある。その段差の位置で凸形のくり抜きによって枡を浮き

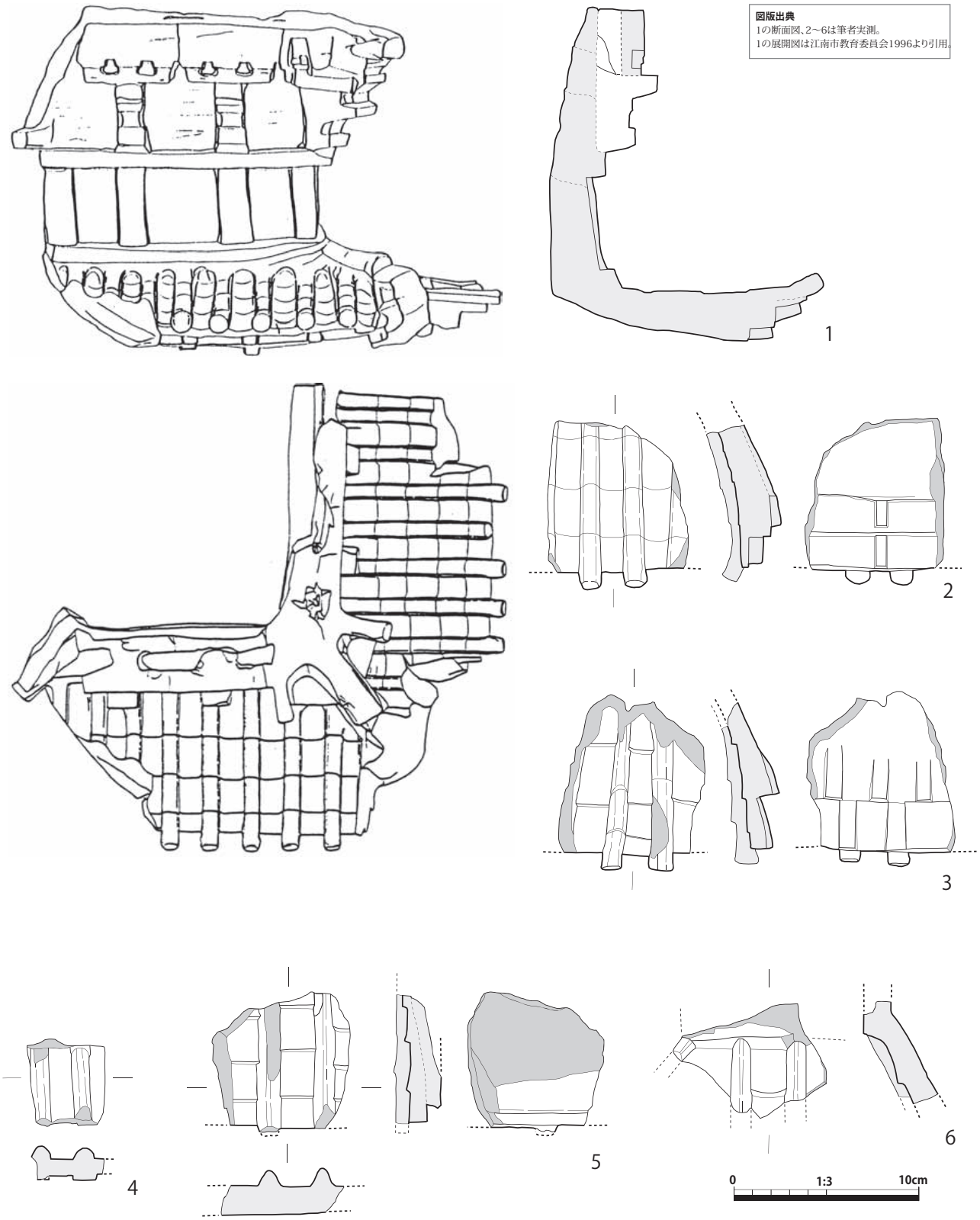


図３　音楽寺遺跡出土の瓦塔

出させるが、くり抜きの際に凸形スタンプは使用していない。以上、軸部の主要素をいくつか提示したが、とりわけ瓦塔の製作時期を決める点になるのが、本体が粘土紐の輪積み成形である点と、空中粘土帯が厚手で補充粘土などを介して本体との接合箇所が多い点である。前者は、時期が下ると 4 枚の粘土板組み合わせになること、後者も、新しいものでは粘土帯が薄く軽量化が進み、持ち送りに載せる接合方法から持ち送りに貼付ける接合方法へと変化する（永井 2006）。このことから当該瓦塔は、猿投窯型として定型化して間もない頃である NN-32 号窯期～O-10 号窯期古段階に位置づけられる。

ところがこの製作時期には問題がないわけではない。というのも当該瓦塔は一部に緑釉を施釉しているとみられるからである*。図 2-1 で示した資料では、組物や柱・長押の一部に釉の残存が認められ、薄く緑色を発している。一方、自然釉であれば厚く溜まってしまうと思われる凹んだ部分には全くといっていいほど釉が認められない。このことから人為的な施釉であると考えられるのである。緑釉の施された瓦塔といえば京都府瀬後谷窯跡出土瓦塔が挙げられ、年代は 8 世紀前半に位置づけられている（京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999）。しかしながら猿投窯での緑釉陶器生産は、9 世紀に入ってから本格化すると考えられており、緑釉の使用という点において当該瓦塔は極端に時期が離れてしまう。特殊品であるからといってしまえばそれまでであるが、猿投窯における施釉陶器生産の開始時期を研究する中で当該瓦塔の位置づけが検討されることを期待したい。

瓦塔 (2)　図 3-3。瓦塔 (1) と同一のようにみえる形状・色調であるが、丸瓦列・平瓦列がともに一枚ごとに段のある節を入れている点が異なる。加えて二軒の垂木表現方法が異なり、瓦塔 (2) では丸瓦列に対応して飛檐垂木があってそれと食い違いで地垂木が表現されている。この点は、瓦塔 (1) 同様に実際の木造建築と錯誤しているが、無段式丸瓦による行基葺きを思わせる瓦表現は実感的で軒先の雰囲気は充分伝わってくる。残念ながら瓦塔 (2) に相当する軸部は抽出できていない。

ところで瓦塔 (2) の焼成具合は、瓦塔 (1) とさほど変わらず色調はほぼ同じである。詳細にみれば別個体に分類しうるものであるが、瓦塔 (1) と組み合わさって造立されていたとしてもさほど違和感はなかったと思われる。瓦塔はいくつかの部品を積み上げるという陶器の中でもやや特殊な使用方法であることから、瓦塔 (1) と (2) を 1 基として使用していた可能性もありうる。ただし出土状況からそれを確かめることはできない。

瓦塔 (3)　図 3-4。屋蓋部のみを確認している。出土瓦塔片の中で数点を認めるのみである。明褐色で硬質の焼成である。反りがほとんどみられない平らな野地に棒状粘土を貼付けて丸瓦列を表現する。半裁竹管状工具を使用している。丸瓦一枚を示す節は破断部でかろうじて確認でき、節の間隔が約 5cm であることがわかる。一方平瓦列に節はない。垂木表現は丸瓦列に対応し、ヘラ削り出しによる。これらの特徴は、猿投窯型瓦塔の屋蓋部で最もみられるものである。ただし詳細な時期は特定しにくい。

瓦塔 (4)　図 3-5・6。屋蓋部のみを確認している。明灰色で硬質の焼成で、屋根瓦を表現した上面には自然釉の掛かっていたものが剥離した跡がみられる。平瓦列は瓦塔 (1) と比較してやや幅広で、段のある節によって平瓦一枚々々を表現する。丸瓦列は、断面がやや三角形に近い棒状粘土で節を付けず、軒先は若干突出させている。裏面は軒先近くで小さな段があるのみで垂木表現が全くない。これらの特徴は猿投窯型瓦塔よりも後述する美濃須衛窯産瓦塔の多くでみられるものである（永井 2005）。以上のように焼成具合や形状が瓦塔 (1) ～ (3) と全く異質なので判別しやすく、破片も 6 点が抽出されている。

軸部との関係は、破断状況からすると一体成形ではないようにみえる。今回調査した資料の中では明瞭な軸部の破片を見出せなかった。美濃須衛産瓦塔の軸部は組物表現があまりないのが特徴なので、壁体のみであると他の陶器片と判別しにくいのかもしれない。

*　報告書では柱に灰釉の痕跡の指摘がある。城ヶ谷和広（平成 20 年当時センター調査課長）はこれが緑釉であると指摘し筆者に伝えてきた。

5. 美濃須衛窯型瓦塔

前項では、音楽寺遺跡で出土した 4 種類の瓦塔ののうち瓦塔 (4) は美濃須衛窯産瓦塔にみられる特徴を有していることを指摘した。同窯産瓦塔を含む美濃地域の瓦塔については、井川祥子によって集成がなされ（井川 1995）、古代各務郡とりわけ美濃須衛古窯跡群を中心に分布することが示されている。また筆者は同地域の瓦塔について、猿投窯型瓦塔の特徴である軸部の空中粘土帯や屋蓋部裏面に垂木表現がない点で、異類型と認識しうる見通しを述べたこともある（永井 2005）。そこで本項では、井川の集成に基づき各務郡の瓦塔を概観しながら、美濃須衛窯型瓦塔の諸要素について確認していきたい。

太田 1 号窯跡群 3 号窯跡　図 4-1。太田 1 号窯跡群の 3 号窯内からは屋蓋部の小片が出土している。平らな粘土板に棒状粘土を貼付けた丸瓦 1 列分しかない小片であるが、丸瓦列の節が深く入れられている点に注目したい。同窯跡群の灰原からは円面硯や「美濃国」刻印のある無台杯も出土しており、官衙向けの製品を焼成していた形跡がある。報告（各務原市埋蔵文化財調査センター 1996）では美濃須衛古窯編年（渡辺 1984）のⅣ期第 3 小期前半に位置づけられており、概ね 8 世紀中葉と考えられる。

天狗谷 4 号窯跡　図 4-2・3。天狗谷 4 号窯跡では傾斜のある屋蓋部片が出土している。丸瓦列は節のない断面三角形で平瓦列も節がない。降棟には 2 か所稚児棟を表現した突起がある。裏面の垂木表現はない。屋蓋部上端は軸部を受ける断面台形の受け部がある。また屋蓋部中央は円孔となっている。軸部は出土していないので全く不明である。当該瓦塔は 4 号窯出土でⅣ期第 3 小期（8 世紀後葉）に属するとされている *。同窯では各種供膳具･貯蔵具の他円面硯や香炉などの鉢類の獣脚部・瓦も出土しており、特別な供給先を思わせる器種構成となっている。

寒洞 2 号窯跡　図 4-4 ～ 7。寒洞 2 号窯跡灰原では屋蓋部・軸部の他に宝珠も出土している。屋蓋部はやや傾斜があり降棟に 2 か所の稚児棟とみられる突起表現がある。丸瓦列は棒状粘土貼付けで節が入るが上端に軽く入れただけである。裏面に垂木表現はない。軸部は初層で中央に出入口の方形孔があるだけで組物や長押などの突起物が全くない。同じ灰原からは鉄鉢や陶馬も出土しており、仏具や祭祀具の生産も行っていたことが判明している。報告によると、窯の時期は美濃須衛古窯編年のⅣ期第 3 小期の終り～Ⅴ期第 1 小期初めとされており、8 世紀末～ 9 世紀初頭とみられる。

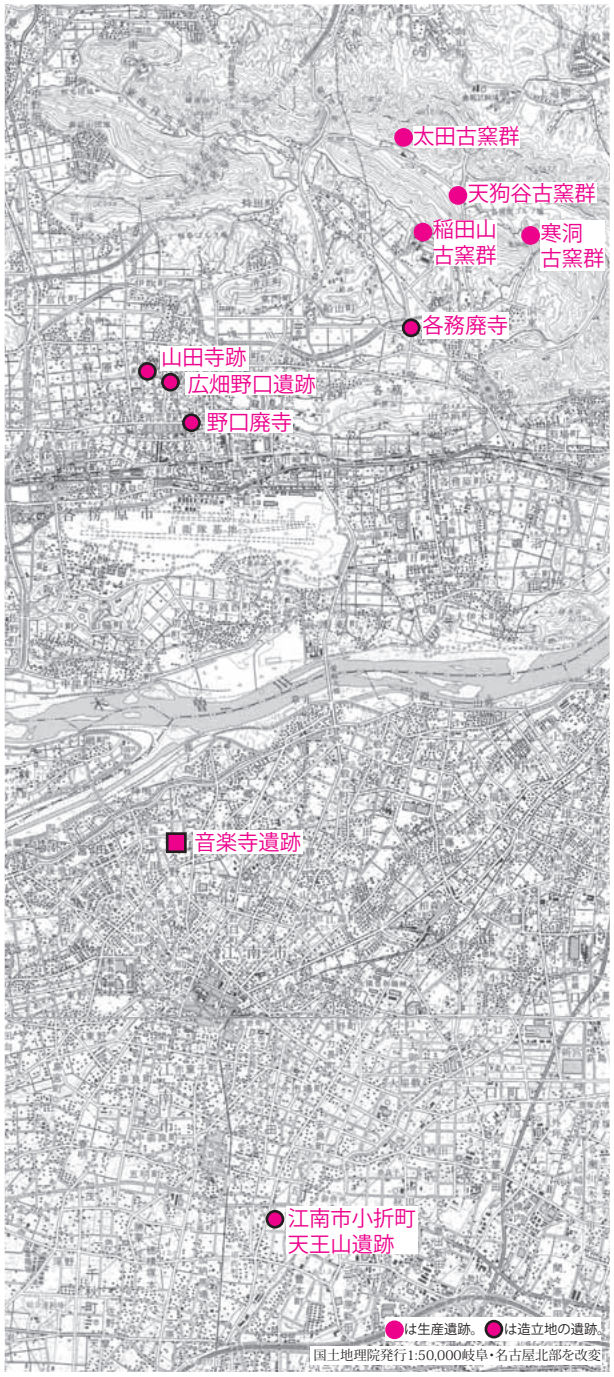
稲田山古窯跡群　図 4-8 ～ 10。稲田山古窯跡群では、11 号窯と 13 号窯で瓦塔が出土している。まず 11 号窯出土瓦塔であるが、不明な点が多いものの報告（各務原市教委 1981）によると、竹管で瓦を施文するとあることから丸瓦列が連続するタイプの屋蓋部であろう。出土須恵器は 8 世紀中葉とみられる。

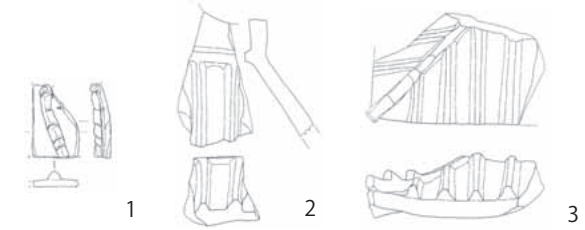
次に稲田山 13 号窯出土瓦塔であるが、屋蓋部とその上に載る軸部を一体成形するもので、軸部は組物表現の突起の他に数カ所の透かしが入っているのが特徴である。屋蓋部は棒状粘土による丸瓦列に軽く節を入れており、裏面に垂木表現もある。降棟には稚児棟が付く。13 号窯出土須恵器には、供膳具・貯蔵具の他に獣脚の付く鉢や円面硯もあり、同古窯跡群内では豊富かつ特殊な器種を焼成している点が注目される。時期は美濃須衛古窯編年Ⅳ期第 3 小期後半（9 世紀初頭）である。

山田寺跡　図 4-15・16。蘇原台地には山田寺跡や平蔵寺跡などの古代寺院遺跡が集中することで知られる。山田寺の創建は 672 年以降に村国氏が飛躍的な発展を遂げた時期と考えられている（小川 2010）。瓦塔は塔基壇から北西の地点 ** で概ね伽藍地内に立てられていたものと考えられる。伽藍地内からは 7 ～ 9 世紀の須恵器が出土しており、瓦塔の時期もまずはこ

*　報告書（各務原市埋蔵文化財調査センター 1998）によると、当該瓦塔は 4 号窯周辺の表土出土とされており、4 号窯以外の可能性もある。天狗谷古窯址群は美濃須衛古窯編年のⅣ期第 2 小期～Ⅴ期第 1 小期であり、時期が前後する可能性は若干だが残る。

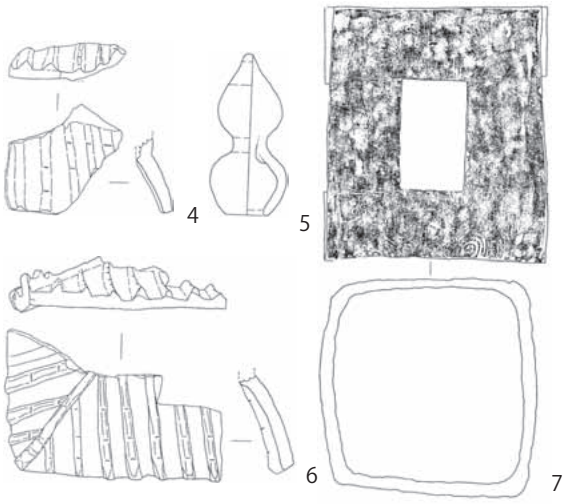
**　第 1 次調査 Pit44 出土。





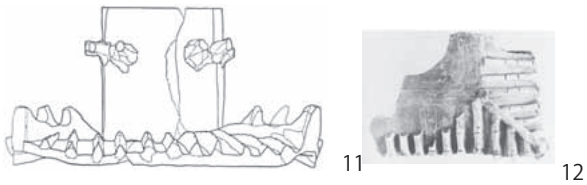
太田1号窯跡群
太田3号窯跡

天狗谷4号窯跡



寒洞2号窯跡

稲田山13号窯跡



各務廃寺

江南市
音楽寺遺跡

山田寺跡

江南市
小折天王山

広畑野口遺跡B地区

広畑遺跡

野口廃寺A地区

図版出典
寒洞2号窯跡:『市史』考古・民俗編
稲田山13号窯跡:各務原市教委1981
太田1号窯跡:各務原市埋文1996
天狗谷古窯群:各務原市埋文1998
山田寺跡:各務原市埋文2010・井川1995
各務廃寺:『市史』考古・民俗編
広畑野口遺跡B地区:各務原市埋文2008
広畑遺跡:『市史』考古・民俗編
江南市小折:『江南市史』資料編4
野口廃寺A地区:各務原市埋文1993・井川1995

図 4　主な美濃須衛窯型瓦塔とその分布（瓦塔実測図は 1/8、分布地図は 1/100,000）

の幅で考えることになる。

出土部位は屋蓋部で、降棟と両脇の丸瓦列がある。ともにヘラを使って行基葺きの状況が的確に表現されている。さらに軒丸瓦文様を型で六弁蓮弁を施文している点も実に細かい。当該瓦塔は一見してわかるように（図 4-16）、他の美濃須衛窯型瓦塔とは異質であり、量産化以前のものと考えてよい。したがって同類型の典型とすることはできないが、丸瓦列の表現方法や特に垂木表現がない点が後に模倣されていったものと思われる。美濃地域における瓦塔の祖形として位置づけられよう。

また井川の集成では、丸瓦列・平瓦列ともにヘラで段をつけて一枚ずつを表現し、裏面の垂木表現がない屋蓋部小片 (図 4-15) について記されている。明らかに発掘調査出土品とは別個体である。井川が示すように、平瓦一枚々々を表現する岐阜県内で唯一の瓦塔である。

野口廃寺 A 地区　図 4-19 ～ 25。野口廃寺も山田寺と同じ時期の軒丸瓦があり創建期は 7 世紀第 4 四半期とみられる。瓦塔は溝状遺構から出土している。この遺構はⅣ期第 3 小期以前に埋没したとされ（各務原市埋蔵文化財調査センター 1993）、このことから瓦塔の廃棄も 8 世紀後葉までになされたと考えられる。したがって瓦塔の造立時期は遡って 8 世紀中葉としうる。溝出土の瓦塔は屋蓋部によって 2 類に分けられる。1 つは丸瓦列に半裁竹管状工具で節を入れるもので、裏面は垂木表現がないものの、赤色塗彩によってそれらしいものが描かれている。もう 1 つは丸瓦列に節がなく裏面の垂木表現もないものである。丸瓦列が平行でなくやや放射状に貼付けられている点に注意しておきたい。そして井川の集成ではさらに 1 類存在するとされ、これは裏面に角棒状粘土を貼付けて垂木表現としている。

軸部については、井川は 2 類に区分するのみで、丸瓦列に節のない屋蓋部に対応する軸部については示されていない。これについて筆者は、器種不明とされた推定直径 27cm の円筒形須恵器（図 4-23）がそれに該当すると考えている。以前提示した、兵庫県三田市金心寺廃寺出土瓦塔の軸部は、推定直径 20cm で縦長の透かしが等間隔に配置されている（永井 2009）。円筒形須恵器も同様に透かしがあってこれに類似する。このような円筒形軸部の瓦塔は播磨・吉備地域と北部九州地域の瓦塔にみられ、先述した放射状丸瓦列の屋蓋部は北部九州地域の瓦塔の特徴と同じである（永井 2008）。北部九州地域の瓦塔は 8 世紀後半の須恵器窯で量産されており時期的にも近い。当該資料の生産地については不明であるが、美濃須衛窯産であるとすれば製作者あるいは発注者の出自系統を考えさせる興味深い資料であるといえる。

各務廃寺　図 4-11・12。蘇原台地の古代寺院群から東へ離れて中位段丘の突端に立地する。発掘調査は実施されていないため寺院跡と確定できていないが瓦塔とともに古代瓦が採集されている。瓦塔は屋蓋部・軸部・初層軸部がある。軸部は筐体に組物表現の突起が 3 方向にあるのみで簡素な造りである。屋蓋部は約 10 点あるが、いずれも丸瓦列は棒状粘土を貼付けたものである。垂木表現の有無や降棟の形状の違いから 3 類に分けられる。垂木表現がある 2 類のうち、丸瓦列の配置が密で断面形も丸いものは、節も浅く入れるだけである。もう 1 類は井川の指摘によれば丸瓦列の節をヘラ状工具で削り込むようにして入れている。降棟も明らかに異なっていて、後者の方では 2 か所の稚児棟も突出しており別個体とみるべきだろう。一方垂木のないものは丸瓦の節を半裁竹管で入れている。現状では景観が復元しにくいが、3 基の瓦塔が造立されていたと考えて大過ないだろう。なお当該遺跡からは泥塔 * も複数出土しておりそれに対応するのか興味深いところである。時期判定の根拠は少ないが、丸瓦に軽く節を入れる点は寒洞 2 号窯跡や稲田山 13 号窯跡に類似しており、8 世紀末～ 9 世紀初頭と推測される **。

広畑遺跡・広畑野口遺跡 B 地区　図 4-17・18。蘇原台地上、山田寺跡の南側に立地する集落遺跡で、両遺跡の出土地点はかなり近接し

* 『市史』での名称。展示では「百万塔」としている。

**　小川 2004 では各務廃寺の瓦を 8 世紀後半としており、瓦葺建物の創建と瓦塔造立の時期が近いといえる。

ている*。整った掘立柱建物群で構成されており一般集落とは一線を画する（岐阜県埋蔵文化財保護センター 2010）。広畑遺跡出土小型鴟尾は全長 9.6cm で、三重県伊賀市御墓山窯跡（7 世紀後半）で出土した陶製仏殿の鴟尾部分長さが約 9cm と同規模である点は注目される。一方広畑野口遺跡 B 地区出土の瓦塔片は近世溝出土である。屋蓋部で隅垂木以外は剥離した状態である。これは各務廃寺出土瓦塔のうち猿投窯型に類似するとしたものに近い。すると小型鴟尾と屋蓋部片の時期は離れているとみておくのがよいだろう。

このほか飛騨国域の高山市三仏寺廃寺でも屋蓋部片が出土している。垂木表現はなく丸瓦列の節は浅い。寒洞 2 号窯跡や稲田山 13 号窯跡の瓦塔に類似し、9 世紀前葉とみられる **。

以上、各務郡で集中する瓦塔群を概観した。これらは窯業地とそれに近い寺院遺跡で出土しているという関係上、造立地で出土した瓦塔についても美濃須衛窯産と一括しても問題ないであろう。時期的には山田寺跡瓦塔が最古で 7 世紀後半代の可能性があり、東海地域全体をみても最古段階に想定できる。これに次いで 8 世紀前～中葉の野口廃寺と太田 3 号窯跡および稲田山 11 号窯跡、8 世紀後葉の各務廃寺と天狗谷 4 号窯跡、8 世紀末～ 9 世紀前葉の寒洞 2 号窯跡と稲田山 13 号窯跡、と展開する。

屋蓋部の特徴を整理すると、8 世紀中葉までは粘土造形による垂木表現がなく、比較的後期のもので付加されている。したがって垂木表現の有無が絶対的な判断基準にはならないのであるが、初期段階に垂木表現なしで定型化しているのは確実といえる。むしろ後になって猿投窯型瓦塔の垂木表現を模倣した可能性もある。なお丸瓦列の節は、半裁竹管状工具で深く入れるものから浅い切り込みだけへと変化しているが、こちらは作業の簡略化で理解される。平瓦の表現はほとんどしないのが主体であるが、山田寺跡出土瓦塔のように丸瓦とともに一枚ずつの表現がなされているものもある。

次に軸部であるが、野口廃寺（井川 1995）・各務廃寺・稲田山 13 号窯跡出土瓦塔では 3 本の突起で組物らしき表現をするのみである。野口廃寺の資料については時期不明であるが、この表現方法は 8 世紀後半～ 9 世紀前葉でほぼ一貫しているといってよいだろう。さらに稲田山 13 号窯出土例ではこれに加えて透かしが入っており、これも猿投窯型瓦塔にない特徴である。柱や長押の表現も野口廃寺出土例にみられる程度で、寒洞 2 号窯出土例では初層軸部の「厨子」化がかなり進んでいる。

以上のように美濃須衛窯産瓦塔には、猿投窯型瓦塔と対比できる特徴を共通して有していることが認められる。そこで、(a) 粘土板の削り出しによる垂木表現がない、(b) 突起状の組物表現、（c）軸部壁面の透かし、の特徴をもって、美濃須衛窯型瓦塔と設定する。美濃須衛窯型瓦塔は、猿投窯型瓦塔と併行して量産された美濃地域の瓦塔類型である。

6. 再び古代音楽寺の美濃須衛窯型瓦塔について

しかしながら両類型は、その分布状況に大差がある。すなわち、猿投窯型瓦塔が尾張・三河・遠江・信濃国域に分布するのに対し、美濃須衛窯型瓦塔のほとんどが、美濃国それも各務郡域に集中していることである。同窯産の須恵器同様に美濃国内で流通していても不思議ではないのだが、出土事例は井川の集成以降ほとんど増加していない。

ところが尾張国域に目を転じると、尾張北部地域に限って美濃須衛窯型の可能性が高い瓦塔がみられる。音楽寺遺跡瓦塔 (4) はまさにそれである。平瓦を一枚ずつ表現する点は山田寺跡出土瓦塔を参照すれば 8 世紀代でも比較的古い段階に想定される。古代音楽寺の造営は、美濃須衛窯産瓦の搬入によってかなりの部分が進められ、そのピークが 8 世紀前半に想定されている点は先述の通りである。このことから、瓦塔 (4) が 8 世紀前半に美濃側から施入され、その後 8 世紀後半になって猿投窯型の瓦塔 (1)

* 広畑遺跡から広畑野口遺跡へと遺跡名や範囲が変更されている。前者は各務原市新栄町 1 丁目で後者 B 地区はそれに北接する。

** 池田敏宏によると、丸瓦列の省略や裏面の木葉痕などの点から 9 世紀中葉とされる。

～ (3) が施入されたと考えられる。これら国境を越えた古代音楽寺にかかる資材搬入は、造営主体である村国氏勢力によってなされたと考えるが、梶山勝は、霊亀 2 年 (716) の美濃国守笠朝臣麻呂の尾張国守兼任を背景として、美濃から尾張北部への流通が活発化したのではないかと述べている（梶山 2002）。確かに、中島郡域（神戸廃寺など）でも同系あるいは同笵軒丸瓦があることや「美濃国」印須恵器の尾張地域での分布状況から導かれる、可能性の高い議論であるが、古代音楽寺に限れば、村国氏が尾張国域に新たな拠点を設けていく過程で各務郡の在地勢力を動員した、「国策」とは別の動向として評価してもよいのではないだろうか。

そして、同遺跡から南へ 5km に所在する江南市小折町天王山遺跡でも、以前に複数の瓦塔が採集されておりうち 1 つは美濃須衛窯型瓦塔の可能性が高い。当該瓦塔は屋蓋部と軸部が一体成形されたと考えられるが、軸部には稲田山 13 号窯出土瓦塔と同様に透かしが入っている点が注目される（図 4-14）。遺跡は五条川右岸にあって周辺に富士塚古墳があり、半径 2km 以内には曽本二子山古墳（前方後円墳）や長福寺廃寺が立地する。小折は「こおり」と読み「郡」に通ずることから丹羽郡家所在地の有力候補でもある。したがって寺院跡と認識されてはいないが、古代丹羽郡の中核であった可能性が高い地点でもある。

加えて三河国域でも美濃須衛窯型瓦塔と考えられる屋蓋部が、豊田市舞木廃寺で出土している。垂木表現がないというだけなので他の破片の出土を待たないと確定的とはいえないが、同廃寺は三河国賀茂郡に所在し、同郡は国境を挟んで美濃国賀茂郡との交流があったと考えられることから、猿投窯が近いながらも美濃地域から施入されたと考えている（永井 2005）。

以上のように美濃須衛窯型瓦塔は、尾張・三河国域においては寺院・官衙関連施設へ限定的に施入されており、美濃国各務郡域での施入先と同様の状況をみることができる。これは猿投窯型瓦塔が一般的とされる集落遺跡からも多数出土している状況とは対比的である。この現象を、須恵器生産地における瓦塔のような特殊品への対応が猿投窯と美濃須衛窯で異なることの表れとみるならば、後者では需要（造立）者に対して一定のラインが引かれていたのかもしれない。あるいは美濃国域の分布状況から、当該地域では需要（造立）者が限定的であった可能性を考えるのがよいのかもしれない。美濃須衛窯型瓦塔は 9 世紀前葉まで生産が継続するので、盛衰の激しい村国氏のような特定氏族に結びつけるのはやや難しいかもしれないが、美濃地域において、瓦塔が特定階層にかかる仏教信仰遺物であることには変わらないのである。

参考文献

愛知県防災会議地震部会　1980 『愛知県の地質・地盤〈その 1〉地形・地質・地盤の状況』
井川祥子　1995 「岐阜県内出土の瓦塔」『博物館だより』No.29　岐阜市歴史博物館
池田敏宏　2003 「瓦塔」『三仏寺廃寺発掘調査報告書』高山市教育委員会
岡田英夫　1978 「五重小塔」『大和古寺大観』第 5 巻　岩波書店
小川貴司　2004 『古代地方都市の成立』言叢社
小川貴司　2010 「第 4 章第 2 節　鐙瓦から見た山田寺」『山田寺跡』各務原市文化財調査報告書第 50 号
各務原市教育委員会　1981 『稲田山古窯跡群発掘調査報告書』各務原市文化財調査報告書第 2 号
各務原市教育委員会　1983 『各務原市史』考古・民俗編　考古　各務原市
各務原市埋蔵文化財調査センター　1993 『野口廃寺 A 地区の発掘調査報告書』各務原市文化財調査報告書第 13 号
各務原市埋蔵文化財調査センター　1996 『各務寒洞窯址群発掘調査報告書』各務原市文化財調査報告書第 19 号
各務原市埋蔵文化財調査センター　1996 『太田 1 号窯跡群発掘調査報告書』各務原市文化財調査報告書第 20 号
各務原市埋蔵文化財調査センター　1998 『須衛天狗谷古墳群・天狗谷窯址群発掘調査報告書』各務原市文化財調査報告書第 23 号
各務原市埋蔵文化財調査センター　2008 『広畑野口遺跡 B 地区発掘調査報告書』各務原市文化財調査報告書第 49 号
各務原市埋蔵文化財調査センター　2010 『山田寺跡第 1・2・3・4 次範囲確認調査報告書』各務原市文化財調査報告書第 50 号
梶原義実　2010 「音楽寺跡」『愛知県史資料編考古 4　飛鳥～平安時代』愛知県
梶山勝　2002 「尾張国葉栗郡の古代寺院と美濃」『名古屋市博物館研究紀要』第 25 巻　名古屋市博物館
岐阜県文化財保護センター　2010 『広畑野口遺跡』 岐阜県文化財保護センター発掘調査報告書第 113 集
京都府埋蔵文化財調査研究センター　1999『奈良山瓦窯跡群』京都府遺跡調査報告書第 27 冊
江南市教育委員会　1999 『音楽寺跡発掘調査報告書』
江南市史編纂委員会　1983 『江南市史』資料 4　文化編
高木志朗　2001 「第 2 編古代」『江南市史』本文編　江南市
永井邦仁　1999 「豊田市郷上遺跡出土の瓦塔」『年報』平成 10 年度　愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁　2005 「東海地方における古代瓦塔に関する覚書」『三河考古』第 18 号　三河考古刊行会
永井邦仁　2006 「東海地方の瓦塔研究ノオト」『研究紀要』第 7 号　愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁　2008 「猿投窯型瓦塔の展開 (1)」『研究紀要』第 8 号　愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁　2009 「猿投窯型瓦塔の展開 (2)」『研究紀要』第 9 号　愛知県埋蔵文化財センター
野村忠夫　1980 『古代の美濃』教育社歴史新書 27　教育社
宮川芳照　1996 「江南市村久野音楽寺遺跡出土の瓦塔」『知多古文化研究』第 10 号　知多古文化研究会
柳澤文庫専門委員会　1966 『大和郡山市史』 大和郡山市役所
渡辺博人　1984 『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』各務原市教育委員会